

福島県立安積高等学校

第129期生入学式 式辞

日 時 平成25年4月8日（月）

場 所 福島県立安積高等学校第一体育館

式辞

「ほのぼのと春こそ空に来にけらし 天の香具山 霞たなびく」と新古今和歌集にあるように、春はほんのりと、まず空にやって来ます。そ（本日は、あいにく雨雲が、空の春を隠しておりますが、）吹く風柔らかに、桜の花咲き初める季節となり、川の流れも、大地も、空も、すべてが生命のエネルギーに充ちあふれようとしております。

本日、県議会議長の代理として県議会議員 山田平四郎様始め、多数の御来賓の御臨席を賜り、第129期生入学式を挙行できますこと、この上もない喜びであります。

ただいま、入学を許可しました320名の新入生の皆さん、入学おめでとう。厳しい入学試験を見事突破し、今は感激と期待とで胸が一杯になっていることでしょう。この喜びの陰にあって、ひたすら健やかな成長を願い、ご苦労された保護者の方々、そして親身になって叱咤激励していただいた小中学校の先生方など、皆さんを支えてくれた方々のことを忘れてはなりません。

さて、本校は、明治17(1884)年に本県唯一の旧制中学校として創立されて以来、今年で129年目を迎える福島県一の、いや日本でも有数の歴史と伝統を有する高校であります。これまでの卒業生は、約3万2700名を数え、様々な分野での活躍は枚挙にいとまがありません。

ここで、「第129期生入学式」という表現に再度注目してください。他の高校では「平成25年度入学式」であり、「第何期生入学式」としているのは安積だけです。ここには、安積という場所で3年間の時を過ごした、数多くの先輩たちの熱い思いが込められていると私は考えています。安積高校129年目に入学、同期生と共に、130年、131年と安積の時間を刻んでいく、そのことを強く心にとどめてほしいとの思いから、他に例を見ない言い方になっているのです。

今、「同期生と共に」と言いましたが、

何かを「共にする」経験が、人と人とをつなぐことは言うまでもありません。

この安積で、場所・時間や言葉・記憶を共にすること、言い換えると、勉学に励み、部活動で仲間の大切さを実感し、紫旗祭、紫の旗の祭りと書きますが、その紫旗祭という学校祭でクラスが一つになり、安積の空気を胸一杯吸い込み、「安積」という学校文化を3年間共有すること、これが安積で学ぶ最大の意義であり、そして、安積の誇り・プライドであると私は思います。

お互いのことを知らなくても、過ごした時代が少し違っていても、安積という文化を「同じくする」ということが、安積を母校とする人と人とを結びつけてきたのであり、それはこれからもずっと変わらないはずです。私事になりますが、私自身も安積の第88期生の一人として、多くの仲間や先輩・後輩に支えられて何とかここまで歩いて来たというのが実感であります。

さて、安積の精神・スピリッツである「開拓者精神」「質実剛健」「文武両道」は男女共学となっても変わることなく、生徒諸君の進むべき道を照らし続けています。また、指導に当たる先生方は、教師として申し分のない力量を持ち、君たちと真剣に向き合う信頼に足る先生方です。先輩達も、先生方の指導により、進学や部活動にすばらしい実績を残しています。ただ、「文武両道」を実践するためには、かなりのエネルギーを必要とします。そして、何と言っても「集中力」が鍵となります。限られた時間の中で、いかに集中して勉学に打ち込み、いかに密度の濃い練習で自らを鍛えるか、安積の教師集団は必ずや君たちをリードしてくれると信じています。

本校では、皆さんが自分の夢を見つけ、その夢に向かって高い志を掲げ、その志を持ち続けることができるよう、学校全体でサポートしますが、自分の夢を実現するためには、今、何が必要なのかを、まずは自分自身で真剣に考える必要があります。夢を実現するための様々な道の中から、どの道を選びとるかによって、高校生である今、何をどのように学ばよいかは自ずと見えてくるはずです。つまり、皆さんは、将来こんなことをしたいという夢～少し遠くにある目標と、そのために、今、これだけのことを学ばなければいけないという、より身近な目標と、二つの目標を持って学ぶことが大切になるのです。

保護者の皆様には、お喜びもさぞかしのことと、心からお祝い申し上げます。私ども教職員一同は、夢あふれる新入生を迎える喜びとともに、責任の重さをこの両肩に感じています。これからの3年間、本校教育の推進に、御協力、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

御来賓の皆様、本日は年度始めのお忙しい中、御臨席を賜り心より御礼を申し上げます。現在本校は、来年の130周年に向けた準備を進めるとともに、充実した学校生活を送ることができるよう、教育環境の整備に努めているところであります。今後とも安積の教育に対し、深い御理解と温かい御支援をお願い申し上げます。

終わりに、あの東日本大震災からほぼ2年と1月が過ぎようとしています。復旧が進んだ部分もありますが、本県の小・中・高等学校・特別支援学校の児童生徒約一万四千人が、未だに県内外で避難生活を余儀なくされている現実があり、復興はまだまだこれからと言わざるを得ません。近い将来、学校で学び蓄えた皆さんの力が必要とされる時が必ずやって来ます。大震災以降、「ふくしまの復興に自分の学びを活かしたい。ふくしまのために何かをしたい」このように考える高校生が増えています。勿論、世界へ飛躍しようとしている生徒も大勢いるわけですが、その場合でも、「3.11以降のふくしま」を心にとめていてほしいと願っています。大震災とその後の原子力災害を経験した私たちは、「ふくしまは、日本は、そして世界はこのままでよいのか、今後、どう在るべきなのか」という、本質的で、かつ非常に大きな難問に向き合っていかなければなりません。

第129期の生徒諸君、大震災を経験した一人の人間として、自分の夢を見つけ、その夢に向かって高い志を掲げてください。そして、その志を持ち続けて、安積の同期生と共に切磋琢磨し、安積の誇りを胸に抱いて、充実した高校生活を送ってください。

第129期生が誇り高き安高生に成長していくことを期待するとともに、三年後の君たちの輝く瞳をイメージしつつ式辞と致します。

平成25年4月8日

福島県立安積高等学校長 久保田 範夫